

## 【実践・研究報告】

## ラリー＝キングの発話における文頭省略と応答誘出

鳥越秀知（詫間電波工業高等専門学校）

**Abstract** The purpose of the present paper is, by a close examination of the transcripts of Larry King Live, (1) to observe the use of declarative sentences with a rising tone, (2) to examine the frequency of initial (situational) ellipsis and (3) to check the occurrences of the question tag “right?” as a response elicitor. The results show that King makes effective use of these verbal strategies in order to elicit response from the guest.

## 1. 初めに

テレビの対談番組における司会者の役割は、可能な限りゲストから興味深い話を引き出すことであるが、司会者がゲストに向ける発話は話し言葉の特徴を色濃く反映している。時間的制約のために、話し言葉は書き言葉とは異なる様々な特徴を示すことが指摘されている (Biber et al., 1999; Brown, 1977; Brown and Yule, 1983; Bygate, 1987; Cook, 1989)。それには、質問、言いよどみ、繰り返し、再編成、修正等さまざまな言語的方略がある。

## 2. 目的

本研究の目的は、米国の著名なインタビューアのラリー＝キングの発話を次の3つの観点から分析することである。

- (1) 上昇口調の平叙文の使用
- (2) 文頭省略 (注1)
- (3) 付加疑問や “right?” などの応答誘出語句 (注2) の使用

## 3. 研究方法

## 3.1 データの取得

研究データとして、CNN international の Larry King Live のトランスクリプトを用いた。毎日1時間放映されるこの番組のトランスクリプトを、CNN international のホームページから取得した (注3)。2005年4月11日から5月6日までの22日間のトランスクリプトをテキストファイル化し、放送日が明示されるようにファイル名を20050411などとした。本研究

では、2人以上のゲストとの対談を除外して、キングとゲスト1人の対談に限定した。この方針の基に22個のテキストから5個を選別し、データA, B, C, D, Eとした(注4)。

### 3.2 ノイズ除去

5個のテキストにはさまざまなノイズが入っているため、前処理として下記のようなノイズを除去しなければならない。

- (a) トランスクリプトの最初と最後の不必要な説明箇所。
- (b) ゲストの出演した映画や演劇の紹介の部分(注5)。
- (c) ゲストの紹介やコマーシャル直前の発言などの視聴者向けの発言(注6)。
- (d) ライブの特徴の1つである視聴者の電話との応答(注7)。

さらに、キングの発言とゲストの発言が重なっている重複行を調整する必要がある。

### 3.3 タグの埋め込み

ノイズを除去した5個のテキストファイルに、文頭省略を示す/ie/というタグを手作業で埋め込んだ。この作業はデータの綿密な読みと平行して行う必要がある。

### 3.4 コーパスAとコーパスB

タグを埋め込んだ5個のテキストファイルの集合は約25000語の語数となり、これをコーパスAとした。例として、キングとジェーン=フォンダの対談の一部を下記に示す。

KING: Are you going to do more?

FONDA: I don't know.

KING: /ie/ Want to?

FONDA: Yes, it would be fun. (marked-20050417.txt)

さらに、コーパスAからKingの発話のみを抽出すると約7500語となり、これをコーパスBとした。その一部を下記に示す。

KING: How did you get "Home Alone"?

KING: /ie/ Great movie.

KING: That was a funny movie. (KINGmarked-20050501.txt)

### 3.5 処理システム

コーパスAからコーパスBを作成するために、さらにコーパスBから実験者が求める表現を抽出するために、Perlによる簡単なプログラムツールを作成し、Dos窓で処理した。Perlはテキスト処理に便利なプログラミング言語で、入門しやすいとされている。

## 4. 結果と考察

### 4.1 発話語数

まず、ゲストとキング氏の発話語数の比較を試みた。表1はキングとゲストの発話語数の比較を示す。

A	B	C	D	E	Mean
5471	5381	6369	4504	4557	5256
1683	2099	1296	928	1645	1530

表1 キングとゲストの発話語数

当然のことながら、司会者であるキング氏の発話語数と比較してゲストの発話語数は多く、その割合は約10:3である。

### 4.2 疑問の提示

相手に質問する時は通例疑問文の形式が用いられるが、時間的制約のある会話や対談などでは、平叙文の文末を上昇口調にして疑問の意味を相手に示すことも多い。図1は、通常の疑問文と上昇口調の平叙文のコーパスBにおける使用回数の比較を示す。

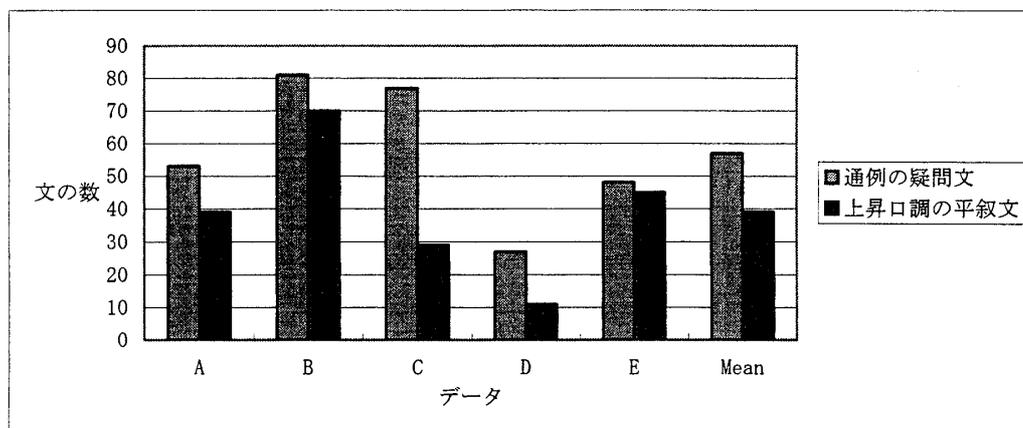


図1 通常の疑問文と上昇口調の平叙文の使用回数

データによって相違はあるが、キングは平均すると57回疑問文を用いると、39回上昇口調の平叙文を用いていることになり、その割合は約3:2である。

### 4.3 文頭省略

Biber et al. (1999)によると、文頭省略は100万語当たりアメリカ英語で3000回以下、イギリス英語で5000回以下である (p. 1106)。Biber et al. の数値を1000語当りに換算し、本研究のデータを加えて、図2に1000語当たりの文頭省略の回数を示す。

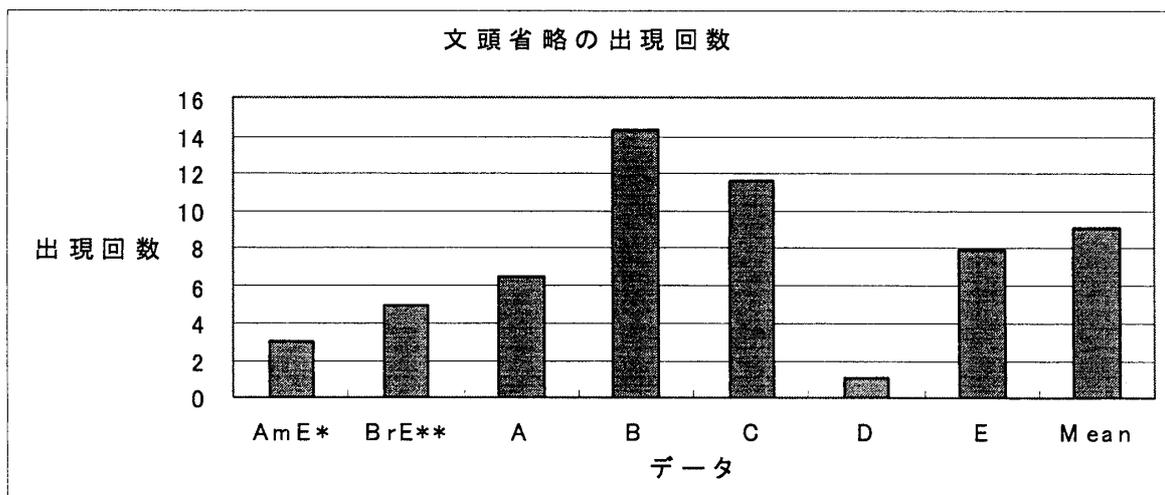


図2 1000語当たりの文頭省略の回数(AmE\* BrE\*\*100万語当たりの出現回数から算出)

データによってばらつきはあるとは言えるものの、キングの発話における文頭省略の回数は9となり、アメリカ英語の3、イギリス英語の5と比較して、多用していることがわかる。

#### 4.4 応答誘出語句

次に、相手から応答を引き出す語句がどの程度キングの発話に用いられているかを調べてみた。コーパス B で用いられた応答誘出語句としては、付加疑問や "right?" などが挙げられる (注8)。図3は、付加疑問と他の応答誘出語句の使用回数を示す。

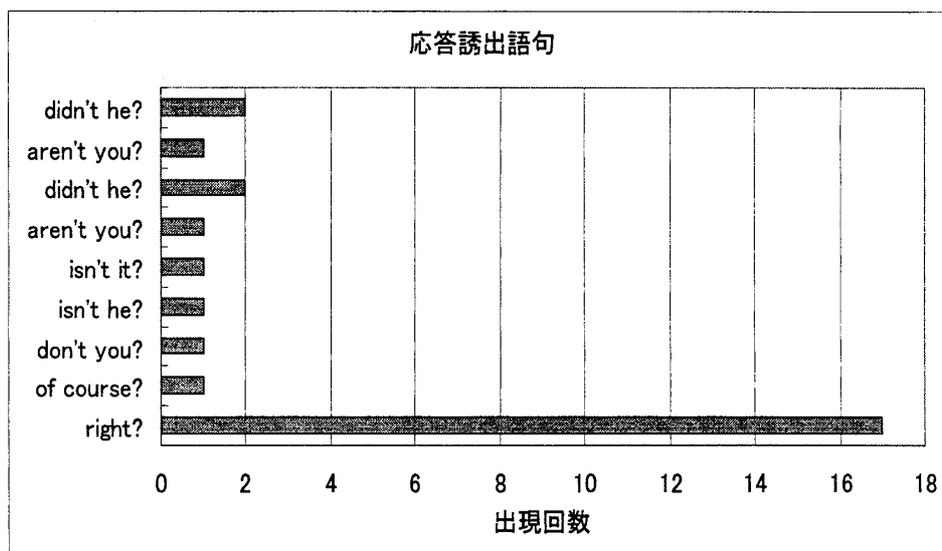


図3 コーパス B における応答誘出語句の出現回数

日本人学習者が学ぶ通例の付加疑問をキングはほとんど用いず、“right?”を多用しているこ

とが特徴的であった。また、“of course?” が 1 例使用されていたが、“right?” と同義的に用いられていたと考えられる。

#### 4.5 考察

テレビの対談番組における司会者の役割は、ゲストからさまざまな興味深い話をできるだけ多く引き出すことである。この意味で、ゲストの発話語数と比較してキングの発話語数の少ないのは当然である。しかし、10 : 3 というゲストとキングの発話語数の比率が他の司会者と比較して多いか少ないかは不明であり、さらに多量のキングのデータを収集し、他の司会者のデータと比較することが必要である。

相手に質問する時は通例疑問文を用いる。しかし、話し言葉では時間的制約があるため、平叙文の文末を上昇口調にすることにより、疑問文の代用をすることも多い。キングの発話における疑問文と上昇口調の平叙文の割合は約 3 : 2 であり、キングが上昇口調の平叙文を多用していることは非常に興味深い。この 3 : 2 という割合に関してもさらなるデータ収集が必要である。

文頭省略は話し言葉でしばしば見られる。アメリカ英語やイギリス英語一般と比較して、キングの発話では文頭省略が多く見られ、無意識的にインフォーマルな印象を与えようとしているとも考えられるが、このことに判断を下すにはデータが不足している。また、データ D では文頭省略は 1 度しか見られなかった。この事実は、データ A, B, C, E の 4 人のゲストが芸能界に属し、一方データ D のゲストが学究肌の人間であることに関係があるのかもしれない。

キングは、応答を誘出する語句として付加疑問をほとんど使わずに、“right?” を用いている場合が 17 例見られた。教育的観点からみれば、“right?” は学習者にとって極めて有用な表現であり、時間的制約のある日常会話で利用することができる。ただし、レジスターの問題がある。例えば、『ユニコン英和辞典』には、「right? は口語で付加疑問の代わりに用いることができるが、目上の人には丁寧な表現を用いること」という記載がある (p. 1299)。確かに“right?” を使えば便利だが、目上の人に無礼だと感じさせる状況もあると思われる。“Is that right?” や “Am I right in thinking ~?” などの丁寧な表現を目上の人には用いるように学習者に勧めるほうが無難であると考えられる。

#### 5. 結論

ラリー＝キングの発話のトランスクリプトを (1) 上昇口調の平叙文の使用 (2) 文頭省略 (3) 付加疑問や “right?” などの応答誘出語句の使用という観点から分析することによって、以下の 3 点を指摘することができる。

- (A) 通常の疑問文と上昇口調の平叙文の使用回数はそれほど大きな違いはなく、通常の疑問文と上昇口調の平叙文の比率は約 3 : 2 であった。

(B) キングの発話には文頭省略が多く見られた。アメリカ英語：イギリス英語：キングの発話の比率は，3：5：9であった。

(C) 通常の付加疑問はあまり用いられずに，“right?” が多用されていることが特徴的であった。また，“of course?” が1例用いられていた。

今後の課題として，ラリー＝キングの発話を大量に調査することと他の司会者の発話データと比較することが挙げられる。

## 付記

本稿は平成17年6月11日の第22回JACET中国・四国支部大会における発表を基にしている。

## 注

1. Biber 他(1999)は文頭省略を下記の3種類に分類している。本研究では，全てを文頭省略としている。

1) 主語の省略：A: What's concubine? B: <-> Don't know, get a dictionary. <I>

2) 助動詞やBe動詞の省略：Oh. You <-> serious? <are>

3) 主語と助動詞やBe動詞の省略：

A: Do you want me go hire a video camera?

B: Yeah <-> be great. <That / It would> (p. 1105)

2. Biber 他(1999)は応答誘出語句(response elicitors)は，付加疑問を一般化した機能を持つと捉えている(p. 1089)。

3. URL: <http://transcripts.cnn.com/TRANSCRIPTS/>

4. キングと1人のゲストの対談に限定し，下記の5個を選択した。

A: 20050417-Interview with Jane Fonda.txt

B: 20050429-Interview With Lisa Marie Presley.txt

C: 20050501-Interview With Macaulay Culkin.txt

D: 20050502-Interview With Dr. Phil McGraw.txt

E: 20050506-Interview with Lauren Bacall.txt

5. ゲストの出演した映画や演劇の紹介の部分の削除については，VIDEO CLIPという語句で検索し，該当箇所を削除すれば簡単である。例えば，以下の部分。

(BEGIN VIDEO CLIP)

HUMPHREY BOGART, ACTOR: What's for dinner?

BACALL: Lori Shannon.

BOGART: For dinner?

(END VIDEO CLIP)

6. コマーシャル直前の発言などは, go away / be right back / take a breakなどで検索すればよい。“We'll be back with Lauren Bacall. Don't go away.”
7. 視聴者との電話の部分は Caller という語で検索し, 削除する。
8. 応答誘出語句は, 文末に位置し, 前にコンマがあり, 応答を引き出す機能を持つ語句をいう。具体例を以下に示す。  
KING: You didn't know it, though, right? (20050417.txt)  
ただし, 下記のように文頭にある場合は文頭省略と捉え, カウントに含めていない。  
KING: Right? Records sell in England. (20050429.txt)

### 参考文献

- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan. (1999). *Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Brown, G. (1977). *Listening to Spoken English*. London: Longman.
- Brown, G., and G. Yule. (1983). *Teaching the Spoken Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bygate, M. (1987). *Speaking*. Oxford: Oxford University Press.
- Cook, G. (1989). *Discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- 末永國明, 山田泰司, 川端一男編 (2002). 『ユニコン英和辞典』文英堂.